

平城宮跡第139次発掘調査現地説明会資料

— 内裏北外郭東部の調査 —

奈良国立文化財研究所

1982年6月26日

平城宮跡発掘調査部

佐藤 信

はじめに 当調査部は、1982年3月29日から、第139次調査として平城宮内裏北外郭東部の発掘調査を行ってきた。発掘面積は約3,800㎡で、調査は現在継続中である。

調査の目的 調査地は内裏の東北方にあたり、南は1963年の第13次調査区、北は1981年の第129次調査区と接する。第13次調査では内裏北外郭東部の官衙建物群とその東を限る築地を検出し、また第129次調査では宮北面大垣のすぐ内側に整然と配置された建物群と内裏東方を南流する幹線排水路SD2700（東大溝）の北延長部を発掘した。なお、東大溝SD2700は、古く1928・32年の奈良県技師岸熊吉氏による調査や、南方の第21次調査（1964～65年）でも遺構を確認している。今回の調査は、この東大溝SD2700および内裏北外郭東隅を確認するとともに、内裏北外郭東部の性格を明らかにすることを主目的とした。

遺構の概要 調査地は内裏が占地する丘陵の東斜面に位置し、宮造営にともない盛土して整地を行なった部分が認められた。調査地西方には前方後円墳市庭古墳があり、整地土中には円筒埴輪片がふくまれていた。今回検出した主な遺構は掘立柱建物6棟、築地2条、掘立柱塀1条、溝11条、土壇7基などである。

宮造営前の遺構としては、斜行溝SD04および土壇SK01、SK05～09がある。SK01は長さ1.5m、幅0.8mの長方形を呈し、底に7世紀後半の土器を埋置しており、土壇墓と考えられる。また、SK05～09は長さ1.2m、幅0.8mほどの隅丸長方形で、粘土を貼った壁体は焼け、中に炭・灰がつまっていた。同様の遺構は第13・129次調査でも検出しており、土師器を焼成した窯である可能性がある。SX02・03は宮造営に際して埋められた地山の凹みである。

平城宮時代の遺構としてはまず東大溝SD2700がある。幅2.4m、深さ1.6mで、人頭大の玉石を6～7段積んで護岸している。溝内の堆積は大きく4層に分かれ、最下層には養老七年（723）～天平初年の木簡が、最上層には天応元年（781）の墨書土器がともなう。調査区北端には橋脚状施設とその下を通る木樋SX23が、その南16mほどには一段低く溝底に石敷を施したSX22がある。また、木樋SX23の南で東大溝の東にとりつく東西溝SD24を検出した。規模は幅2.7m、深さ1.6mで、溝内の堆積は東大溝とほぼ同じである。なお、東大溝SD2700の3個所で1932年の岸熊吉氏による発掘区を確認した。

内裏北外郭地区では東面築地SA705と北面築地SA13の交点部分を確認した。わずかに残る築地基壇は粗い版築で作られており、その上面で築地寄柱穴をいくつか検出した。北外郭の北面築地は今回はじめて検出したもので、内裏の築地回廊からの距離は約86mをはかる。

調査区北西部では東西溝SD9797を検出した。この溝は東西溝SD24の西延長線上にあり、北の第129次調査で検出した官衙建物群の南を区画するものである。掘立柱建物SB25は門と考えられ、この門に接続して東西に築地が走っていた可能性もある。

北の東西溝SD9797と内裏北外郭北面築地SA13の間には、5間以上×2間の小規模な掘立柱建物SB15以外には顕著な遺構はなく、広場的な空間（SH14）であったと思われる。広場のほぼ中央で検出した唯一の掘立柱穴SX26には径40cmの柱根が遺存しているが、性格は不詳である。

東大溝SD2700東方の発掘区内では3棟の南北棟掘立柱建物SD18～20が重複しており、別な官衙の存在を物語る。

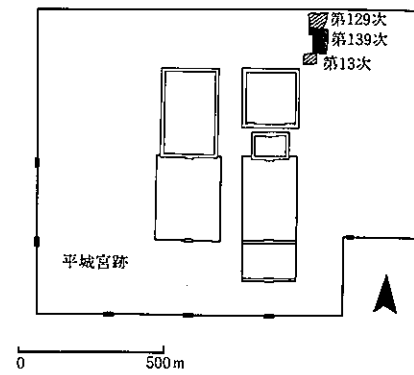


図1 第139次発掘調査位置図

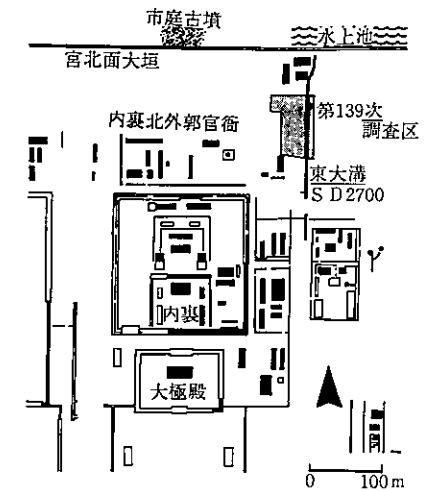


図2 内裏周辺遺構配置図

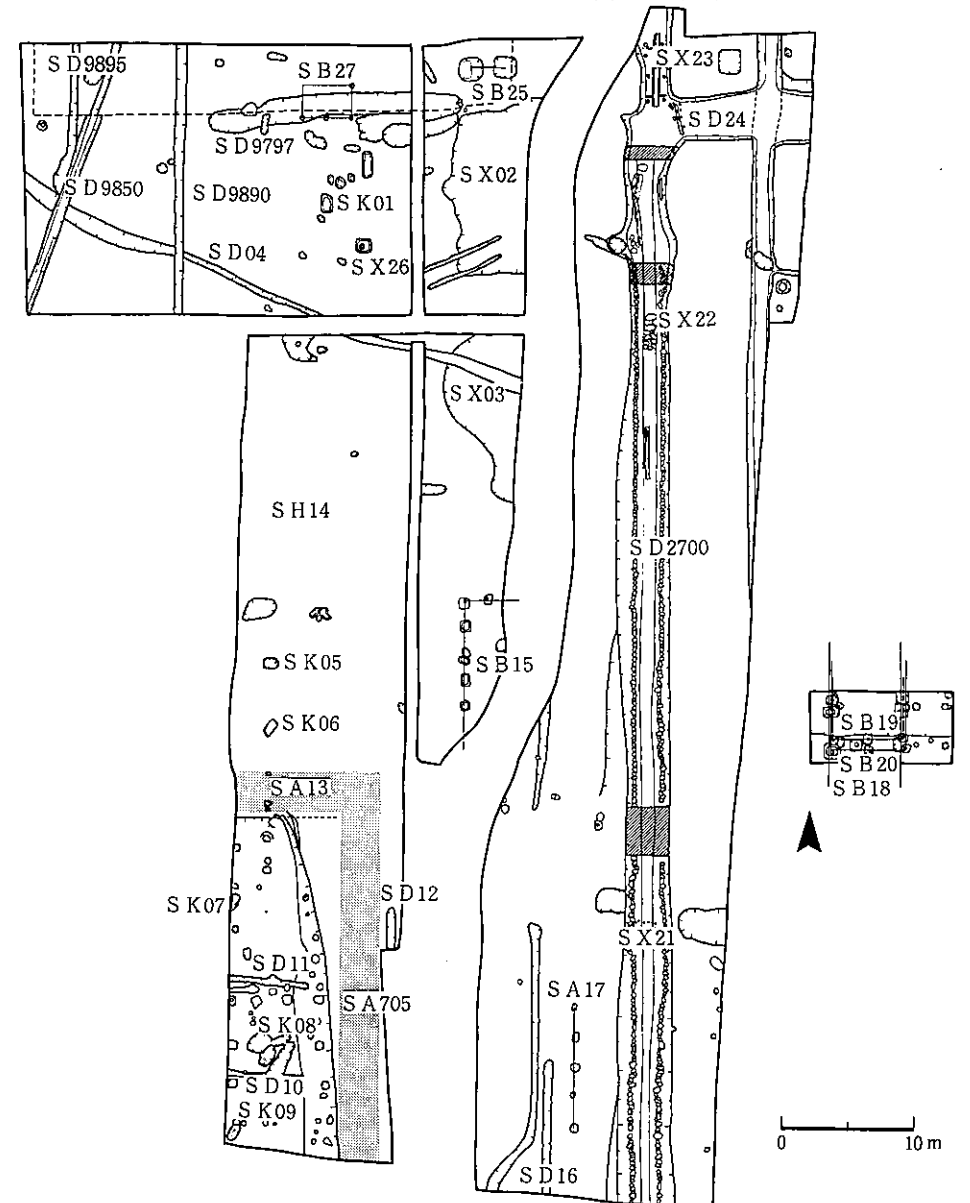


図3 第139次発掘調査遺構図

木簡積文

東大溝SD二七〇〇

- (1) 駿河國志太郡正丁作物布乃理一籠
天平勝寶六年十月
- (2) 因播國法美郡廣湍郷中男作物海藻六斤
神龜三年六月廿七日
- (3) 隱伎國海部郡 佐吉郷日下マ止々 調鯨六斤 養老七年
- (4) 隱伎國海マ郡 伊加六斤七年
- (5) 〔佐吉カ〕 上部郷訓議里孔王部 小在調海藻六斤 天平三年
- (6) 紀伊國伊都郡指理郷白米五斗 天平六年三月
- (7) 參河國播豆郡大御米五斗
- (8) 〔口部〕 天平寶字四年十月
〔位下春部口口〕 万呂

墨書土器積文

東大溝SD二七〇〇

- 〔大膳〕 〔内糞口〕 〔官〕 〔人給所〕 〔寺〕 〔女カ〕 〔口口〕 〔厨〕 〔天應〕 〔鳥膏〕 〔酒〕 〔供養〕 〔上番〕 〔長〕
- 東西溝SD二四
- 〔天應元年〕 〔大膳〕
- 内裏北外郭地区
- 〔中宮安 中宮〕

- (9) 仲御蘭 進
- 〔典藥寮〕 退
- 〔時カ〕
- (10) 口口口口
- (11) 歳後天恩母倉口口人口
- 〔草〕 〔貝カ〕
- 東西溝SD二四
- 〔物カ〕 中二斗八升八合 集二斗六升九合
- (12) 口口口口
- 〔物カ〕 右大膳職皇太宮以下口口口口
- 〔物守カ〕
- (13) 〔近江國〕 坂田郡上作饗三斗員六十三隻
- (14) 隱伎國 海部郡作佐郷 調紫菜二斤
- (15) 大井里海部小付
- (16) 類肝二具
- 〔天平元年十月〕

出土遺物 東大溝SD 2700 とそれにとりつく東西溝SD24を中心に大量の遺物が出土した。両溝からは229点の木簡をはじめ、木彫面・「木」陰刻木印・木箱といった木製品、銭貨（和同開珎15枚・万年通宝4枚・神功開宝12枚）・金銅製垂飾金具・銅製飾鉾・帯金具・鉄釘等の金属製品・平城宮で2点目の鳳凰紋鬼瓦片をふくむ多量の瓦埴類・墨書土器130点余をはじめとする土器類、円面硯・転用硯・土馬などが出土した。また、内裏北外郭地区からも大量の軒瓦や凝灰岩切石片、土器などが出土している。

まとめ 今回の調査では、平城宮東部の幹線排水路である東大溝SD 2700を80mにわたって発掘し、その規模と構造を明らかにするとともに豊富な遺物を得た。また、新たに東大溝につながる東西溝SD 24を発見した。そして、内裏北外郭の東北隅を確認して北外郭の規模を確認し、さらにその北側に南北約51mにわたって広場の空間があることを明らかにするなど、平城宮北部の様相について貴重な新知見を得ることができた。

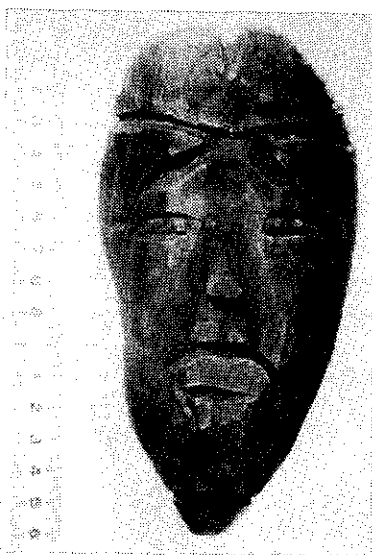


図4 東大溝出土木彫面

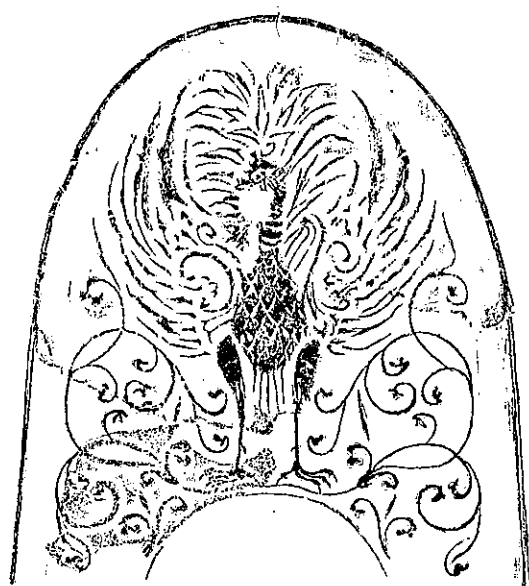


図5 東大溝出土鳳凰紋鬼瓦復原図

時期 (平城宮瓦編年)	東大溝SD 2700				東西溝SD 24				内裏北外郭地区					
	軒丸瓦		軒平瓦		軒丸瓦		軒平瓦		軒丸瓦		軒平瓦		合計	
	型式	点数	型式	点数	型式	点数	型式	点数	型式	点数				
I 期 (和珎～養老)	6275・6284 6308	9	6664・6665	19	6233・6281	2			2	6284	4		4	
II 期 (養老～天平)	6304・6308 6311・6313 6314・6225	29	6664・6682 6688・6663	35	6311・6313	2	6663	1	3	6225・6304 6311・6313 6314・6227 6135	88	6664・6666 6685・6663 6682	58	146
III 期 (天平勝宝頃)	6133・6282 6307・6316	17	6689・6691 6694・6721 6732	31	6282・6307	2			2	6282・6307	18	6689・6691 6694・6721	17	35
IV 期 (天平宝字頃)			(6725・6726)	1										
その他 (型式不明)		7		3				1	1			15		5
合計		62		89		6		2	8			125		80

表1 出土軒瓦一覧